# 【完結】ヤンドリ　～気づいたらヤンデレに追いかけられていた～

リゾートドM

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

昔から知り合いだった沙綾とＰｏｐｐｉｎ、Ｐａｒｔｙが出来る前にやまぶきベーカリーで知り合ったりみの様子が最近おかしいことに気付いていた主人公の優はこのことにどうしようも出来なく大変なことになってしまう

※小説初投稿なのと日本語力０のため至らぬ点があるかと思いますがよろしくお願いします

# 目次


メインストーリー
りみと沙綾の異変 ―― 1
状況整理と教育開始 ―― 6
甘い教育と夜ご飯 ―― 10
夜の誘惑と長い長い1日の始まり
16
登校と新たなる刺客 ―― 21
ウサギ小屋の中で ―― 28
涙の金髪少女 ―― 33
甘甘パーソナリティ ―― 40
悩みと食事会 ―― 44
怒っちゃった ―― 50
デートと最後のピース ―― 55
ネコ耳少女は天使でした ―― 60
気づいたらヤンデレに追いかけられていた ―― 64
Ｐｏｐｐｉｎ、Ｐａｒｔｙ Ｅｎｄ
分岐Ｅｎｄ Ｐｏｐｐｉｎ、Ｐａｒｔｙ ―― 69
沙綾＆りみ ＥＮＤ
分岐Ｅｎｄ りみ＆沙綾 ―― 76
戸山香澄 ｅｎｄ
分岐Ｅｎｄ 戸山香澄 ―― 84
市ヶ谷有咲ｅｎｄ
分岐Ｅｎｄ 市ヶ谷有咲 ―― 89

花園たえ　ｅｎｄ
分岐Ｅｎｄ　花園たえ　95
山吹沙綾　ｅｎｄ
分岐Ｅｎｄ　山吹沙綾　102
牛込りみ　ｅｎｄ
分岐Ｅｎｄ　牛込りみ　110
おまけ
ゆりりんりみりん姉妹　118
戸を開けると４つの山があった　126

# メインストーリー
# りみと沙綾の異変

（なぜだ　俺は何でこんなところに）
目を覚ますと暗い空間にいた
物置？　周りにダンボールが積まれていた
「一体何があったんだ・・・」
思わず呟く
そのとき外から足音が聞こえる
・・・2人？
がらっ
物置の扉が開かれた
眩しくて2人の人影しか見えなかった
「ふふ　起きた？」
「えっ　起きたけどこれなに」
そこにいたのは沙綾とりみだった

二人の姿を見た瞬間物置に閉じ込められる前のことを思い出した。

☆

俺はＰｏｐｐｉｎ、Ｐａｒｔｙの練習を見に来ていた

というのも俺は昔から仲良かった沙綾の家やまぶきベーカリーの手伝いとかいろいろしていた

最近沙綾の友達の女子たちがやまぶきベーカリーにパンを買いに来たりなどでいろいろ話すうちに仲良くなり彼女たちがバンドを組んでいるＰｏｐｐｉｎ、Ｐａｒｔｙの練習を見たりするようになった

俺はバンドとかど素人で全く分からんが香澄に半ば強制的に連れてこられてしまった

「どう？キラキラしてた？」

「キラキラしてたよ」

正直キラキラするの意味が分からなかったがめっちゃ頑張っていたのは事実だし肯定する

「イエーイ!」
「おい香澄!マイク入れたまま叫ぶな!」
有咲の突っ込みが炸裂する
「えーいいじゃんありさぁ」
「よくねぇ!うるさいんだよ」
「まあ蔵だし騒いでもいいんじゃない?」
おたえがボケに参戦する
このとき2つの突き刺すような視線で見られていたことに気付いていなかった
練習が終わり帰る途中沙綾にパンをもらったので一緒にいたりみと公園で食べることにした
りみとはＰｏｐｐｉｎ、Ｐａｒｔｙが出来る前から知り合いだった
まあチョココロネを買うときに会うからね
今日もチョココロネ食べることは予想がついていた
公園についてベンチに座る
「「いただっきまーす!」」
食べている途中に二人が黒い笑顔を浮かべていたのが怖かったがおいしかった
その後いろんな話をしていたが食後１０分くらいで急に眠気が来てしまった

「ごめ、何かすっごい・・・ねむい・・・」
その言葉を残して眠ってしまった

☆

そんなことを思い出していると一気に眠気が吹っ飛んだ
「そっか　寝ちゃってたんだ
ありがと　公園からここまで運ぶの大変だったでしょ？」
「そんなことなかったよ～
あとね　寝かせたのは私たちだから」
その言葉と同時に2人が中に入って物置の扉が閉められる
立ち上がろうとしたが左右の腕が途中で動かなくなった
同時に金属音がなる
真っ暗の中焦ったが明るくなった
天井に電球があったみたいでりみが付ける

「逃がさないよ?」

# 状況整理と教育開始

「逃がさないよ?」
りみにそう言われて危機感を覚える
部屋が明るくなってとりあえず状況を確認する
両手足に手錠がついていて完全に動けない
「二人が俺を寝かせてさらにここから逃げられないってどうして?」
沙綾「いっつも香澄たちとベタベタベタベタして・・・
昔からずっと一緒だったのに　私以外の子にも目を向けるようになって」
りみ「でもね　気づいたの
どうしたら一緒にいられるか　こうすれば私たちといられるでしょ?」
「まあそうだけど　何でそんなに俺と一緒にいたいの?」
沙綾「それは・・・ゆーくんのことが」
「!!!???」
「好きだから!」

りみ「だから私たち以外の女の子を見てほしくないの」
沙綾「でねさっき食べたパンに睡眠薬を入れたの」
びっくりだった
まさかこんな状況で告白されるとは思ってなかった。
しかも睡眠薬を飲まされてるとは
でも・・・
「何で二人で手を組んでるの？
独占したいんだったら協力しなくてもいいんじゃない？」
「それはね　私が昔からゆーくんを見る度に良く分からない気持ちがあったの
でねポピパが出来る前からやまぶきベーカリーに良く来るりみりんと仲良くて良く話してたんだけどあるとき相談してみたの。そしたらね」
「そのときに恋ってこの気持ちのことなんだって沙綾ちゃん自覚したの
私もねそのときに同じ気持ちがあったからいろいろ話してね」
「二人だけのものにしたらいいじゃんってことになったの
お互い助けあって気づいたこの気持ちなんだから」
「だから私と沙綾ちゃん以外の子には渡さないからね」
「そうだったのか

　でもここで暮らすわけにはいかないでしょ？」
「そうだね　でも明日は土曜日だし月曜日まで学校休みだからしばらくここにいてもらうよ」
「月曜日からは？学校とかあるし」
「月曜日までここでゆーくんを見て他の女の子のことを見れないようになったら学校行かせてあげる♪」
　一応学校は行けるのかな
　休日いろいろしたかったけど無理そうだな
　なら大人しくしとこ
「言っとくけどここから出るために大人しくしてたら一生学校行けないか取り返しつかないことをするからね。
　ちゃんと教育もするけど学校に行って他の女の子と仲良くしたり私たちから逃げるのもダメだからね」
「分かったよ」
　心を読まれてんのか知らないけど考えていた案が全て消え去ってしまった
「じゃあ今日の教育を始めようか」
　えっ教育ってなんだよ

すぐに二人の顔が近付いてくる

「んむ」

「「んちゅ」」

いきなり二人にキスをされてしまった

# 甘い教育と夜ご飯

あれからどれくらい時間がたっただろうか
多分1時間くらいは体制を変えたりしながらずっと二人にキスされている
りみと沙綾の甘い香りで頭が働かなくなってしまっていた
りみの香りはとても甘くて優しい
沙綾は良く香澄にパンの香りって言われてるけどもちろん女子特有の香りがする
ちょっと甘酸っぱいような香りだ
香りを言葉で表現するのは難しいから得体のしれないものに襲われている気分だ
前から意識していたが0距離で二人の香りを嗅いでいるとヘンな気持ちになってしまう

★

「「ぷはっ」」
やっと唇が解放された
「お腹すいたね～」
りみの言葉で夜ご飯の時間をとっくに過ぎていることに気づいた
「もう沙南達を寝かせてる時間なんだね」
「ちょっと夕食の準備してくるね」
扉を開いてどこかに行ってしまった
「ふぅーー」
一人になってちょっと気楽になる
りみと沙綾と一緒にいるのはいいけど地雷を踏まないようにとかいろいろ気をつけていたからね
ちょっと腕を持ち上げてみる
ジャラっと音がして鎖も持ち上がる
その先にはもちろん手錠がくっついていて逃げられるわけがなかった
反対の先っぽを見ると鎖の途中で二股に別れている
二股別れている両端も手錠がついている

・・・初めてこんな手錠を見た
何で輪っかが3つああるんだろうと考えていると再び扉が開かれる
沙綾「そんな手錠見ても外さないよ？」
「別に手錠を外して欲しくて見てた訳じゃないよ」
りみ「ならいいんだけどね
まあいいや　ご飯食べよ？」
「うん
でもどうやって食べるの？」
りみ「ふふ　あーんしてあげる♪」
えっ恥ずかし
自然とドキドキしてしまう
従うしかないか
「「頂きます」」
「はい　あーん」
ぱくっ
めっちゃうまい
沙綾「おいしい？」

「めっちゃおいしい！」
りみ「私見たいなめっちゃだねー」
「ちょっと関西弁っぽくなった
でもそれくらいおいしい！」
沙綾「良かった～」
りみ「次は白ご飯だよ　あーん」
「あちち」
りみに白ご飯を食べさせられたが炊きたてなのかめっちゃ熱い
でもよほど食べさせたいのか気づいていない
このままじゃ熱いのを食べさせてきてやけどしそうだった
でも下手に言うと面倒なことになりそうだしなぁ
ちょっと恥ずかしいけどこれしかないか
「りみ　ご飯熱いからふーふーしてくれない？」
りみ「ふぇ？いいの？あっでも私が恥ずかしい／／／」
沙綾「炊きたてだもんねー　こっちのお肉は横になったままじゃ食べにくそうだね
そうだ」
沙綾は俺の分の肉を食べた

おいそれ俺んだぞ
少し噛んでいたが沙綾はこっちを見つめるとそのままキスしてきた
「「〜〜〜」」
沙綾はもちろん俺も、見ていたりみも顔が真っ赤になってしまう
そのまま肉を俺に移す
これが口移しっていうやつなのか
やがて唇が離れる
沙綾「勢いでやったけど慣れないなぁ」
俺「さっきだってキスしてただろ」
沙綾「それとこれとは別なの／／／」
りみ「私だって！えい」
りみにも口移しをされる
さっきの白ご飯がちょうどいいくらいの温度になっていた
ついでにりみの口いっぱいに貯めたと思われる唾液も入れられる
甘っ
りみ「ふふ　おいしい？」
その笑顔にドキッとしてしまう

その後も食材がつきるまで口移ししてくれた

# 夜の誘惑と長い長い1日の始まり

夜ご飯の片付けが終わって二人がまた戻ってくる
「あのさ　風呂とかトイレってどうすればいいの？」
「お風呂は入れないから体拭こうか
トイレは目隠ししながら連れていってあげる　着いたら外していいよ」
「拭くだけなんだ～　まあいいか」
「教育が終わったら入れるからね　じゃあ体拭こっか」
そういうと俺の服に手をかける
えっ脱がされるの!?
沙綾「なにびっくりしてるの？
ちゃんと着替えあるし脱がないと体拭けないでしょ」
「着替えもあるの」
りみ「もちろん　ぬぎぬぎしようね～」
待てよ　これ手錠外されるんだよね
脱がされる前に逃げれるんじゃね

袖まで脱がされたな　そろそろ手錠外さないと着替えられないしもうそろそろかな
沙綾「なに期待してるの？
手錠は外すけど逃がさないよ」
鎖を少し緩くしてちょっと手が動くようになっただけだった
そのまま外すことなく手錠の先端まで脱がされる
りみ「ちょっと面倒だけどこうしたら絶対逃げられないでしょ」
そのまま2つに別れている鎖の先の手錠を1つ外す
1つ外してももう一つの手錠のせいで逃げられない
そこから服を抜いた後もう一度棒に手錠をつける
もう片方の鎖の方も同じ動作をして袖を腕から外す
それを両腕して脱がされた

★

やっと体拭きと着替え終わった
沙綾「結構手間かかるね」
りみ「仕方ないよ　ゆーくんが逃げないようにするにはこれしかないんだから」
「そうだね　じゃあ寝よっか」
二人が俺を挟むようにして横になる
りみ「ちょっと狭いね」
沙綾「２人くらいのスペースしかなかったからね」
沙綾が電気を消す
完全に寝る体制に入ったのだが結構狭く体が密着する
・・・いろいろ当たってるし濃厚な、いい香りが俺を襲う
「ドキドキしてる？私もほら…分かる？」
「ちょっ沙綾！おまっ」
「沙綾ちゃん大胆～　私もゆーくんの片手借りるね」

両手に花とよく言うが今の状況は両手に胸だ
ダメだ意識したら絶対ヤバい
さらに二人は俺の服の中に手を入れてくる
りみ「ふふ　ゆーくんもドキドキしてるね」
「んんっ　止めてぇ～」
「嫌！止めない　気持ち良いでしょ？」
俺の胸を撫で回す二人
気持ち良すぎるこのままじゃ理性が飛びそうだった
「もうらめぇ　寝ようよ～」
沙綾「しょうがないなぁ　寝よっか」
俺の両手とかが解放される
助かったぁ
りみ「明日からもっとハードなのが待ってるし　おやすみ～」
・・・全然助かってなかった
その後寝るまで結構時間がかかった

★

土曜日朝
ゆっくり寝てたがパチっと目覚めた
何か体が重い
眠たい目をどうにか動かして見ると沙綾とりみに抱きしめられていた
俺は抱き枕じゃねーぞ
まだ彼女たちは寝ているので動こうにも動けない
扉の隙間から光が漏れているのを見ると多分朝なんだな
面倒なことになりそうだが暇だし２人を起こそ
これから長い長い１日が始まった

# 登校と新たなる刺客

火曜日朝
この休日の間いろいろあった
3連休をいいことにりみと沙綾が横を離れることは無く、愛情を注ぎ込まれた
そして今日は学校がある日だけど行けるのかな
さすがに欠席は、無遅刻無欠席者としてやりたくないことだ
当の彼女たちは俺を抱きしめながらまだ寝ている
今が何時かはわからないがまだ5時台であろう
こんなこと考えていても仕方ないので二度寝し始める

★

ワターシノーココーロハーチョッココロネー
何か歌が聞こえる
目覚ましか
横でモゾモゾ動いてる感触があるが視界がはっきりしない
りみ「ゆーくん起きてぇ～」
「あれ　もう朝なの？」
りみ「そーだよ　学校行こ？」
「いいの？」
沙綾「休日ちゃんと教育したからね　でももし他の女の子に目移りしたら教育じゃあ済まないからね」
「分かったよ」
沙綾「じゃあ朝ご飯食べよっか」

★

朝ご飯と身支度を済ませて学校に行ってる途中に2人と話していると朝の話になった

「そういえばね　朝目覚ましに使った曲はね　私と沙綾ちゃんしか歌ってないんだ～」

「そうだったのか　いつか洗脳されそうだわ」

「洗脳するための目覚ましっていいかもね♪　目覚ましどころか私たちがいないときにずっと聞かせたいな♪」

あっ別の意味の地雷を踏んだ

学校に到着して早々にポピパが集合する

香澄「おっはよー！」

りみ　たえ　沙綾　俺「「「「おはよー」」」」

有咲「おっおはよ」

俺「朝から元気だね香澄」

香澄「元気は私の取り柄だからねっ」

有咲「ほんと元気しか取り柄ねーよな」

香澄「そんなことないですぅ」
平和だな
ただ何か変だ
誰か分からないけどヤバいオーラを感じる
振り向いたら怖そうだったのでやめておいた
キーンコーンカーンコーン
ホームルーム開始前予鈴のチャイムが鳴る
急いで席についた
授業中はさっきのヤバいオーラについてしか考えていなかった
沙綾とりみの地雷を踏んだかどうかで心配だったからだ
もしそうなら大分ご立腹だろうな
昼休みポピパ全員と集まって昼飯を食べる
休日のことがあってか知らないけど両隣に沙綾とりみが座った
香澄「そーいえばね　昨日Ｒｏｓｅｌｉａの練習見てきたんだ～
そしたらすごかった！ポピパの練習でやりたいな～」
沙綾「どんなことをするの？」
などと食べながら会話が弾む

やっぱりこういう時間が楽しいな
りみ「ねぇゆーくん　ハンバーグ作ってきたよ
はいあーん」
俺「ちょいきなりつっｋ　むぐっ」
たえ「あー私もあーんしたいな～」
香澄「私も！」
沙綾「じゃあ私も」
俺「えぇ～」
有咲「お前ら・・・」
まとも人な有咲に助けの目を向けるが引きまくってダメだ
そのまま口に色々入れられる

★

学校が終わりポピパの練習を見に行く

今日はＲｏｓｅｌｉａの練習を取り入れるとかでものすごく真剣にやっていた
沙綾もりみも特に変わらずやっていて休日のが夢みたいだった
たえ「もうこんな時間か～　そろそろお開きにしよっか」
香澄「そうだね！　いやー今日はすっごく真剣に出来たね」
りみ「めっちゃ練習出来たね」
有咲「やっぱりＲｏｓｅｌｉａすげーな」
沙綾「じゃあ帰ろうか」
俺「準備早くしろよー？」
香澄「分かってる～」
そのとき俺の携帯から着信音が鳴る
まあ後でいいや
りみ「じゃまたね」
沙綾「今日は何もしないけど明日朝学校一緒に行くからね」
俺「分かったー」
家に着くときにさっきの着信が気になって携帯を見る
ーーーーーーーーー
おたえ

私の家にきて
ーーーーーーーーーーー
どうしたんだろ
今日いつもに増して口数少なかったし心配だ
行くか
家まで来ていたが玄関を開けずに返信して自転車を出し漕ぐ
おたえの家に着くとインターフォンを鳴らす
秒速でおたえが出てくる
たえ「来てくれたんだぁ　そうだよね。やっぱり優しいね」
俺「おたえ　どうしたの？」
たえ「ちょっと話があるの　上がってくれる？」
俺「分かった」
よほど深刻な話だろう
心配しつつ靴を脱ごうとしたそのとき
バチバチバチバチ
後ろから何かを当てられて気を失ってしまった

# ウサギ小屋の中で

んっ？
何だろ
何か息が苦しい
何かが顔に押しつけられている
ちょっと動くと柔らかい感触がする
しかもすっごい甘い香りがする
何となく心当たりがある
これってまさか
「んーーーーー！んぐーーー！」
「あっ起きた？」
その柔らかいものから解放される

予想通りおたえの胸だった

「恥ずかしいの？」
「そりゃあそうだろ　おたえは恥ずかしくないの？」
「全然　胸でドキドキしてくれるなら嬉しいし」
　しばらくおたえは俺を抱きしめていたがそのまま顔を近づける
「んちゅ」
「んぐっ」
　おたえにキスされる
　おたえの長い髪が俺の顔の周りを覆って視界はすべておたえしか見れない
　しかも髪に覆われているせいでおたえの香りがものすごくする
　やべぇ　ぼーっとしてきた
　しばらくして唇が離される
「ねぇ　私の愛どう？」
「どうって言われても　恥ずかしいというか」
「もっとしっかりした感想ないのー？」
「そんなこと言われたって　その・・・やっぱり好きなの？」

「うん　ゆうくんのこと好きだよ」
「まじっすか・・・　／／／」
どうするよ
りみと沙綾にも告白されてるしマジでどうしよ
「何か迷ってるね～　まあ今日の夜はここにいてもらうから良く考えてね」
「拒否権はないのね」
相変わらず分からん奴だ
仕方ないのでここで泊まるしかないのであろう
と考えていたがおたえの好きなことを考えてみる
確か・・・
となると絶対やばいじゃん！
「おたえ・・・その・・・」
「ん？どうしたの？お風呂？」
「えっ…」
ドンピシャで当てやがった
おたえは風呂好きだ
この前ポピパで泊まりにおたえの家に来たときもノリで入らせようとしてきた

もちろん４人はノリノリだったが有咲に追い出されてしまった
有咲のおかげで助かった訳だがもうツッコミ役いないし絶対絶命なのでは
「安心して　一緒に入ろ?」
「安心してない！一緒に入るとかないでしょー！」
「何で?」
「何でじゃねー」
結局彼女を説得出来ず脱衣場まで来てしまった
何の躊躇もなくおたえは俺も目の前で脱ぐ
あっ見ちゃった
「そんなに見てくれるのは嬉しいけど早くゆうくんも脱いで?」
「いや　だってぇ」
「しょうがないなー　脱がしてあげるから」
「えっまってー　脱がさないでぇ」
言ったそばから脱がされてしまう
そのまま連行されてしまった
「体洗うからこっち向いて～」
「じ、自分で洗えるからぁ」

「いいから！　えい！」
「おたえ　おまっ」
いきなり背中に胸を押し当ててきた
しかも石鹸が付いているのかよく滑る
その誘惑に耐えられず洗われることになってしまった
いろいろあって今はおたえも洗い終わり抱きしめられながらやっとお湯に入っている
［アレ］まで洗おうとしていたがさすがに抵抗した
「休日の間にやっぱり汚染されたんだね」
「汚染って・・・」
「なにされてたか分かってたんだけどいざ抱きしめたらあの二人にマークされてるのがよく分かっちゃう　嫉妬しちゃうな～」
「・・・」
「だからね　今日は私がマークするから」
その後風呂から上がっても誘惑されたりでなかなか寝れなかった

# 涙の金髪少女

朝早く目覚ましをかけて起きた
ここは俺の家ではなくおたえの家だ
昨日は家に帰っていないので学校の用意も出来ていない
なので朝早くに家に帰らなければならない
おたえが寝ぼけながら見送ってくれた
おたえの家から自転車を飛ばして１０分くらいで家に着いた
登校出発時刻の２時間前に帰ってきた
急いで家に入って用意をする
のだが・・・
沙綾「もぉー　おたえったらゆーくんを独り占めして～」
りみ「やっぱり帰ってきたんだね」
俺「待て待て何でここにいんの」
りみ「ゆーくんがどっか行っちゃったからゆーくんのふとんで寝ちゃった」
沙綾「本当はゆーくんと添い寝するために来たんだけどね」

俺「まじかよ」
驚くことにりみと沙綾は何があったか分かっているようだった
ちょうど学校の支度が終わったところで登校まで1時間半だった
朝飯は食べていないからまだ時間はかかるけど
なのでリビングに行くと既にパンが用意されていた
やまぶきベーカリーのパンだな
沙綾「早く食べよー！」
俺「ありがとう沙綾」
沙綾「いいよこれくらい　頂きます」
俺「頂きます　ふっ相変わらずりみはチョココロネなんだな」
りみ「もちろん～」
二人とも超ご機嫌だ
昨日おたえといろいろあったのにこんなでいいのか
それとも昨日あったことを分かっていないのか
そんなことはないはず
だってさっきおたえが独り占めしてたことを知っている
訳わかんね～

沙綾「りみりん、チョココロネ何個持ってきたの？」
りみ「たぁくさん持ってきたよ～」
俺「数えてないのかよ」
りみ「だってぇ　いっぱいあるんだもぉん」
沙綾「すっごい幸せそうだね」
俺「ああほんと　声がいつも以上にとろけてるぞ」
りみ「めっちゃ幸せ～」
それともご機嫌なのはパン食べてるからなのか
それだったらやまぶきベーカリー凄すぎだろ

★

特に何もなく学校が終わる

有咲以外のポピパ４人からめっちゃベタベタされていたくらいか
・・・結構何もない訳じゃないな
蔵練に行くためにみんなと歩いていたのだが
どうも有咲の様子がおかしい
何がおかしいのか分からないがいつもと違う
そんな感じがした
ツッコミがうすいのかな
俺「有咲？ツッコミするとこでしてないような気がするんだけど」
有咲「はあ？ツッコむところは私の自由だろ」
俺「ごもっともだわ」
でも何かがおかしい何なんだろう
蔵練を見ている最中も違和感があった
その違和感が何なのか必死で探る
そしたらちょっとだけ分かった気がする

違和感が出るときは必ず俺と喋るときだけで他の４人とは普通だということ

もちろん間違えてるかもだけどそんな気がする
蔵練が終わりみんな帰るが俺は有咲の片付けを手伝っていた
その間有咲の口数が妙に少ない気がした
俺「有咲ぁ　こっちの片付け終わったぞ」
有咲「了解～　こっちももう終わる～」
俺「オッケー」
有咲「ねぇ　やっぱり今日おかしかったか?自分でも思ったんだ、キーボードがうまくできなくて・・・　　悩みがあるんだ。聞いてくれる?」
俺「もちろん　有咲がいつもと違うって言うことはわかってたしその悩みが分かってるなら聞くくらいしか出来ないけど　それでもいい?」
有咲「聞いてくれるだけで・・・いいぜ」
俺「そっか　じゃあ聴くね」
有咲「それでな　最近優がポピパの４人と急速に距離が縮まってるのをみてモヤモヤするんだ
そのモヤモヤが何なのか分かんないし
それに何か寂しいっていうか」

有咲「私を一人にしてほしくない！」

ちょっと泣きそうな勢いだった
いや泣いてる
確か有咲ってばあちゃんといつも暮らしてるよな
それって両親に何かあったってことかもしれない
有咲「やっと・・・やっと一緒にいてくれる人を見つけたのに・・・」
俺「最近確かにあの４人とさらに仲良くなったな　有咲は素直になれなくてなかなか近づけないのは俺も分かっているから・・・だから」
有咲「ありがと　今の言葉でわたしがどうすればいいか分かった気がする」
俺「そ、そう？なら良かったけど」
有咲「その・・・お礼に泊まっても・・・いいよ　というか泊まっててくれ！」
俺「それもうお礼でも何でもないやん　ふっいいよ」
有咲「やった！ありがと～」
違和感が何なのか分からなかったがとりあえず笑顔が見れて良かった

これ告白されたってことなのかな
だったら4股になっちゃうよ
まあ今日は何も考えないようにしよう
というか有咲の口調変わった気がするけど何を思ってるんだかな・・・
これから有咲の家でお泊まり会が始まる

# 甘甘パーソナリティ

有咲の家に泊まっているんだが有咲は、いきなり俺が泊まることになったので買い出しに出掛けた
料理も有咲が作るらしい
手先は器用だから心配はしてないけどいつもばあちゃん料理なので自分から作るのは驚きだった
しかもご機嫌で出掛けていたがあれだけ泣いてたのが嘘のようだ
俺は暇なので床に寝転んでいる
これからのことを考えているのだがうまくまとまらない
そんな事していたら玄関から音がなる
有咲「ごめんなー　遅くなっちゃった」
俺「別にいいよ　今から料理でしょ、手伝おうか？」
有咲「手伝わなくていいから！」
俺「んじゃあここで待ってるわ」
有咲「あいよー」

有咲は台所にそのまま直行していった
また一人でめっちゃ暇だ
有咲の本棚はつまらなそうなものばっかだし
するとトレーに食事を載せて有咲が来る
有咲「おまたせー」
俺「結構早かったね」
有咲「途中まで作ってたからな」
俺「なるほどね」
有咲の作ったご飯はすっごくおいしかった
次々に口に放り込む勢いで食べていた
いつの間にかすべて平らげていた
俺「有咲ってこんなに料理うまかったんだ」
有咲「あ、当たり前だろっ」
俺「ははっ　そっかー」
その後世間話とかで話していたがいきなり有咲が近づいてくる
座ったまま腕を組んだりしている
有咲「ねぇ　体ヘンな感じしない？」

俺「えっどういう・・・ひゃん」
唐突に俺の話題を出したと思ったらいきなり体を触られる
普通にわき腹を撫でられただけなのにゾクッとするほど気持ちいい感じがする
有咲「さっきの料理に薬入れたんだ　ちょっと触られるだけで気持ち良くなっちゃうっていう噂なんだけどすっごい効いてるな」
俺「ひゃぁ　んん　にゃんでひょんなことぉ」
有咲「自分に正直になってやりたいことをしてるんだ　私だって優に近付きたいんだから」
その後体中を触られたりしたあげく有咲の豊かな胸で［アレ］を挟まれたりして搾り取られてしまった
さすがに行為には至らなかった

★

有咲の布団で寝ていた
起きたらそんな状況ですぐ横には有咲がいる
いつものツインテールを解いて寝ている
とりあえず通学バックの中には筆箱などしか入っていない
これはおたえの家に行ったときにわざわざ朝早く家に帰るのが結構しんどかったからもし次に誰かの家に泊まることがあったらということを想定して家にあった勉強道具を学校に全部持っていたりしたからだ
まさか1日で役に立つとは思ってもなかったが
起きてからすぐにアラームがなる
正直いきなり鳴ったのでびびったが平然を装う
有咲「おはよ　優」
俺「有咲おはよー」
4股ということに悩みながらもまた1日が始まる

# 悩みと食事会

有咲の家に泊まった後数日がたった
あの後は誰の家にも泊まることは無かった
ただポピパ全員に教室でベタベタされるようになったのだが
そう、有咲もなのだ
有咲も教室で俺と腕を組んだりとかしていた
さらに授業中寝てて写せていなかったノートも積極的に見せてくれたり分からない問題を細かく教えてくれたりする
香澄がわからないと言っていても放置してた有咲がここまで変わってしまうとは
口調も女子っぽい喋り方になってきた
前に有咲は猫をかぶって他のバンドの子たちと花見に行ったらしいがすぐにいつもの有咲に戻ってしまったらしいので今回は猫をかぶっているわけではないのであろう
あの時のビデオ見せてもらったことがあるけど必死に耐えてるの面白かったな
有咲もこの通り変化したが今まで考えてみて何かがおかしいと思う
一つはあれだけ教育だの何だのって言っていたりみと沙綾が何も言わず笑顔でいる

ことだ
だってもし2人以外をみたら教育以上のことをするって言ってたやん
明らかに知ってそうなのだが何もしてこないのが怖い
嵐の前の静けさじゃなければいいんだけど
もう一つは香澄だ
いつもスキンシップしてきていたが最近は4人の方がスキンシップをしてきて香澄が大人しくなった
あの4人に香澄が何か言われたのか心配だ
そんなことを考えていたら蔵練に行く時間だった
俺は今教室ではなく中庭の隅っこにいて誰も見つけられない所だ
もしポピパなら一緒に行くために捜している頃であろう
・・・しょうがない　考えていても仕方ないので立ち上がった
その瞬間だった
「「「「あーいたーーーー!」」」」
ホントに探してたのか
しかも結構探してた場所近いし

★

練習をとりあえず見ているが特に香澄は何か言われた訳では無さそうで元気だった
まあ意外に香澄って内に秘めやすいからまだ分からないが
声もいつもより綺麗な気がする
他の４人は演奏中も俺を見つめていた
これはこれで恥ずかしいんだけど
それぞれに素人なりのアドバイスをした後解散となる
明日から休日だ
やっと休めるなど考えながら帰っていた
おたえはウサギを見たいと先に帰って沙綾も家の手伝いで先に帰っていった

香澄は別方向でいない
今一緒にいるのはりみだけだ
腕を組まれて歩いているんだけど歩きにくい
りみ「ねぇ　ゆーくん」
俺「ん　どした？」
りみ「昨日ね、沙綾ちゃんの家で料理したんだけど作りすぎちゃったから今日の夜ご飯に食べない？」
俺「いいの？帰った後スーパー行くのめんどかったんだー　んじゃありみの家に寄って食材を持って帰るわ」
りみ「私の家で食べない？容器が無くて持ち帰れなそうなの」
俺「そ、そこまでしてくれんの？じゃあお言葉に甘えて」
りみ「ふふっそうそう、遠慮しないでいいんだよ～」
その言葉のあと腕を組まれていたのだが手を優しく繋がれる
これも結構恥ずかしいことだ
でも何故か安心してしまう
横のりみの笑顔でドキッとしてしまう

りみの家に着いた
夕ご飯の用意を手伝いたかったのに一人でやると聞かなかった
それでりみとゆりさんの部屋で待たされている
ゆりさんも親も見当たらないけど一人暮らしっていうことはないよな
どっか出かけているのかな。気にしない方が良いであろう
りみ「おまたせ～」
俺「わ、めっちゃ豪華！」
りみ「えへへ　ありがとう～」
りみと二人っきりで食事が始まる
最初は会話が無くてちょっと気まずかったけど話題が1つ出た後は気にすることなく楽しい食事会になった
りみ「デザートもあるよ」
俺「まじか！ほんと豪華やな」
りみ「ほんと豪華だね　オレンジジュースもあるよ」
俺「おお！ありがとう」
二人して顔を見合わせ微笑む
こうしてみると何だか・・・

りみ「新婚さんみたいだね」
俺「何で俺の考えを読めたの!?」
りみ「同じこと考えてただけだよ」
俺「そっかー」
りみ「同じ考えなら・・・いいよね」
俺「うわ　ちょっりみ!?んむ」
いきなりりみは俺を押し倒したかと思うとキスし始める
本能的に逃げようと思ったけど力が出ない
しかもこれ　有咲の家で体験したような気持ちよさが全身に走る
りみ「んっ　逃げたらダメでしょ?ゆーくん　んちゅ」
キスされるだけで気持ち良くなって力が出ないとは・・・
もう理性が飛びそうだった

# 怒っちゃった

何分キスされていたかもう分からない
ただただ気持ちよさに身を任せていただけだった
りみ「目がトローンってしてるよ　まだ始まったばっかりなのに」
俺「まだあるの？耐えられないかも・・・　っっっ」
りみに俺の胸を触られる
と同時に［アレ］にも刺激がくる
ん？なにかがおかしい
だってりみの両手はオレの胸に触れてるから他の場所が触れる訳がない
その刺激の部分を見てみると

沙綾がいた

俺「えっ沙綾!?ひゃん」
沙綾「なにびっくりしてるの？りみが先に始めてただけでちゃんと私もいるよ」

りみ「オレンジジュースに気持ち良くなる薬を入れたのは正解だったね
ちょうどいい時間だったし」
沙綾「そうだね。ねぇゆーくん、この前からおたえとか有咲にいろいろされてたでしょ
ついて行っちゃったのは仕方ないけどお仕置きがいるよね」
俺「何でそのことを」
沙綾「ＧＰＳ付き盗聴器を仕掛けてたの」
俺「まじで!?」
りみ「うん。だから沙綾ちゃんと一緒にお仕置きすればめっちゃ気持ち良くなれるよね♪
有咲ちゃんたちにされたときの気持ちよさを忘れさせてあげる」

そういうと俺を仰向けからうつ伏せへと回転させる
りみは俺の顔をスカートの中に入れてパンツに押し当てる
んっ　りみのパンツからいい香りがする
そして沙綾は俺のズボンとパンツを脱がすと尻を撫で始める
俺「んぐんんっ　んんんんん」

りみ「私のスカートの中どう？」
俺「んんんんー」
りみ「えへへ、喜んでる」
沙綾「んーお尻撫でるだけじゃあお仕置きにならないし、こうしてあげる」
パチーン
パチーン
沙綾は俺の尻を叩き始めた
叩かれてるのに痛さより気持ちよさが勝ってしまう

俺「んっ　ん」
沙綾「お尻ペンペンどう？気持ちいい？ドラムを叩いてるとやりたくなっちゃうんだよね～」
りみ「鼻息荒くなってるよぉ。沙綾ちゃんすごい！」
変な属性に目覚めてしまいそうだった
叩かれてるのに気持ち良すぎる
そんな気持ちのせいで少しばかりの抵抗すら出来なくなってしまう
そのまま数十分がすぎた

ようやく叩き終わったのか手が離されスカートの中からも解放される
俺「はぁはぁ」
りみ「目が虚ろだよ？」
沙綾「ぼーっとしてるし、そんなに気持ちよかった？」
思わず頷く
りみ「じゃあ完全に力抜かせてあげるね♪　んっれろ」
沙綾「身を任せてくれていいんだよ？れろ」
俺「りみぃ、沙綾ぁ　だめぇ」
二人は両耳を舐め始める
ぬるぬるした感触が心地いい
舐められてる音だけで気持ち良くなりそうだった
すぐに力が抜けて3分ももたなかった
りみ「そろそろトドメ刺してあげる♪」
沙綾「せーの」
「「ふー」」
俺「ひゃぁああん」
さっきまで耳を舐められてぬるぬるしていたところに生暖かい息が両側から優しく

吹きかけられて果ててしまう
りみ「ふふ　体がビクンビクン震えてるよ」
沙綾「もうしばらく立てないよね♪まだ有咲にされた分はまだしてないからこのままヤっちゃうね」
俺「はぁ　何で…脱ぎ始めてるの・・・何をされるの」
りみ「ゆーくんがとっても好きなこと♪」
そのまま2人は俺の［アレ］を挟んで搾った

# デートと最後のピース

土曜日は夜まで立てなかった
力が抜けすぎたり何度も搾られたりして寝っ転がるのが精いっぱいだった
そんな中口だけは動くので二人と喋っていたのだが
沙綾「ゆーくん、明日デートしない？」
俺「デート？」
りみ「うんデート　沙綾ちゃんの希望で海に行った後に私が前から気になってたチョコレート専門店行きたいな」
俺「いいよ」
りみ、沙綾「「ふふ　やったー」」
普通にしていればすっごくかわいいんだけどね
手間がかかって結構大変なんだよな
今の二人の笑顔は素敵だった

★

朝起きたら予想通り二人に抱きしめられながら寝ていた
こうやってみるとりみはともかくいつもお姉さん気質の沙綾まで甘えるのって結構新鮮だなと思った
このまま抱きしめられてるとおかしくなりそうだったので無理やり２人を起こした
眠たさを振り払い、準備した後出掛ける
のだが両手首に手錠を付けられている
外に出たら逃げられるからだとかで付けられてしまった
長袖で何とか隠してるという状態何だけど歩きにくい
沙綾「本当に海でいいの？いくら気温は寒くなくても水温はもう入れるほどではないと思うんだけど」

俺「入ろうとしてるの？さすがに無理じゃん見るだけ」
沙綾「やっぱそうだよね～」

沙綾の行きたかった海に来てテンション上がっている沙綾とりみは砂浜に絵を書いたりしていた
俺はそこの絶景とか写真に撮ったりせっかく2人の良い被写体がいるので2人の遊んでいる写真も撮っていた
沙綾「ゆーくんと一緒に写真写りたいなー」
俺「いいよ　三脚たてるね」
りみ「3人でも写りたいし2人ずつでも写りたいな～」
俺「おっけー分かった」
海でいろんな写真を撮った
海には入れなかったけどこれはこれでいい思い出になったと思う
もちろん海では手錠を外してくれてたので楽だった
次にりみの行きたかったチョコレートの店に来た
思っていた店とは全然違いすぎた

チョコレートがいっぱい売ってるだけかと思っていたがチョコレートファウンテンとかがあり、この店で食べれるってことだった
しかもめっちゃ安い食べ放題があり、りみのチョコレートガチが発揮された瞬間だった
りみ「ふふっゆーくん　あーん」
俺「ちょっいきなり食べさせんなって　パクッ」
りみ「チョコレートファウンテンにイチゴを付けてきたんだ～　めっちゃおいしいでしょ」
俺「うん！」
沙綾「沙綾ちゃん嫉妬しちゃうな～　ということであーん」
その後食べ放題が食べさせ放題になってしまったがこれも楽しかった
17時くらいに地元に戻ってきてりみと沙綾はそれぞれの家に帰る
すっげー疲れた
何でかは分かっている
今日家を出て一度も座っていないのだ
昨日媚薬で気持ち良くなっていたときに尻を叩かれていたのだが効果が切れてめっちゃ痛いのだ

長時間座ってると痛さがヤバかったのでほとんど立っていた
その疲れでゆっくり歩いていると前から見覚えのある髪型の子がきた
香澄「あっ！ゆーくんだー」

# ネコ耳少女は天使でした

今香澄の家に来ている
香澄と会った後フラッとして香澄の家が近かったので連れて来てくれた
どこにも座れなかったし昨日いろいろあったせいで疲れすぎちゃったのかな
座れない代わりに立つか寝るしかない
なので香澄のベットで横にならせてもらっている
最初は遠慮したけど何度もいいよって言ってくれたのでベットに乗った
香澄のいい香りが染み付いていてドキドキしてしまった
もともと香澄の家には３０分もいない予定だったのだが流れで夕飯まで出してもらえるとかまで進んでしまったのでそうすることにした
ということで香澄は料理を作りに行ってしまった
ポピパの子に料理を作ってもらうことが多くその中で薬を入れられたこともありちょっと警戒していた
まあ入れないことを信じようか
香澄「美味しい美味しいご飯が出来たよ～」

俺「ありがとう～　エプロン付けてるんだ」
香澄「うん、似合ってる？」
俺「似合ってるよ　刺繍もすごい！」
香澄「やったー　じゃあ食べよっ」
俺「そうだね　っっっ」
香澄「大丈夫？座れる？」
俺「ちょっと痛いかも」
香澄「じゃあ横になってていいよ　食べさせてあげる　・・・もう私のゆーくん痛めつけないでほしいなぁ　でもこんなこと出来るからむしろ感謝かな」
俺「ほんと　面目ないっす　何か言った？」
香澄「ううん何に言ってないよ　一応おかゆとか寝たままでも食べやすそうなの作ってるから」
俺「本当にいろいろ考えてくれてありがとう」
香澄「そこまで言われると照れるな～えへへ」
香澄すっごい優しい
今までは無理やり食べさせたりとかだっだけど香澄はちゃんと気を使って食べさせてくれる

そういえば香澄に聞きたいことがあった
俺「ねぇ香澄、最近学校であまり元気ないっていうかおしとやかな感じだけど何か言われたの？」
香澄「ううん何にもないよ。ただ４人が最近ゆーくんといて、ゆーくんは大変そうだったから抑えてたの」
俺「そうだったんだ　何かありがと」
香澄「いいよー　・・・苦労しているゆーくんを癒せば私を見てくれるし♪」
俺「何か言った？」
香澄「何でもないよー」
俺「そっか　ねぇ香澄、食べ終わったら片付けくらいはしたいんだけど」
香澄「いいのっ私こうみえても家事くらい出来るから！」
俺「ほんと何も出来なくてごめんね」
香澄「別にお礼欲しいわけじゃないからね」
俺「天使かよ」
香澄「嬉しいな～ゆーくん！」
俺「あははっ香澄のおかげで元気出た！ありがと。そろそろ帰るよ」
香澄「大丈夫なの？泊まっててもいいよ？」

俺「そこまで面倒かけるわけにはいかないからな」

特に薬を入れられることなく楽しい会話をした後香澄の家から帰る

# 気づいたらヤンデレに追いかけられていた

香澄の家に泊まった日の翌日学校へ行くと俺の机に寝そべっているおたえと俺の椅子に座っている有咲がいた

俺「おたえ、有咲なにしてんの？」

たえ「ゆうくんの気を吸収してるの～」

有咲「べ、別に座ってるだけだからな」

俺「おたえに関しては意味分からんし有咲も座ってる理由を聞いてるんだよ　とりあえずどいて」

たえ「えーどうしよー　あっでも本物来たし　えい！」

俺「おいーおたえー抱きつかないで」

有咲「おい先に抱きつくのはずるいぞ　私だって！」

俺「有咲まで～」

教室に入った瞬間２人に抱きつかれる

周りは３、４人くらいいるのだがお喋りをしていてこっちを見ていない

感触がやばい・・・一発でデカいってわかってしまう

前面から抱きついているおたえは　大きくなった［ソレ］に気づいてしまったみたいで抱きついたままおたえの股で［ソレ］を擦り付ける
もちろんおたえの胸も擦り付けられる
それを見ていた有咲は負けじと胸を背中に擦り付けながら首筋を舐め始める
さらに左肩におたえの顔が、右肩に有咲の顔が乗る
２人の髪が俺の鼻に触れる
２人のいい香りが俺を襲う
気づいたときにはもう動けなかった
俺「おたえー有咲、ダメェ　やめぇ」
たえ「体は正直だよ？」
有咲「優しくするから」
俺「あっっはぁっっ」

「「ちょっと何してるの!?」」

大きい声が３つ重なった
その瞬間上下運動が止まる

その後の修羅場でりみと沙綾のブラックオーラがすごかった
授業中に座って気づいていたのだが2人に擦りつけられていた場所が濡れていた
有咲もちゃっかり俺の尻に擦り付けていたみたいだ
たった数分間だったけどこんなに濡れるってことはまさか履いてないんじゃない!?
後ろを振り向くとおたえも有咲もガン見していた
いやポピパ全員だった
沙綾もりみも香澄まで
朝のが地雷だったよなー
さすがに恥ずかしくなったので前を向いた

昼休みに中庭へ昼食を食べに来た・・・というよりポピパに連れてこられたという方が正しいであろう
たえ「ゆうくんのハンバーグ欲しいなぁ」
俺「おーいおたえ言ってるそばから持って行かないで〜」
沙綾「じゃあ私のハンバーグあげる」
りみ「私もうチョココロネしかない」

有咲「野菜も食わないとダメだぞ　サラダあげる」
香澄「じゃあ私はご飯あげる～」
俺「待て待てみんなから分けてもらった具がもう弁当になってるじゃん」
たえ「じゃあ私はー」
昼休みも朝のことがあったのかいつもより強引な感じだった

★

あの空気の中正直蔵練に行くのは気まずかった
が行かないわけにもいかないので蔵のドアを開く
いきなり思い切り抱きつかれる
抱きついたのは香澄だった
さらに4人に抱きつかれる
明らかに様子が違う
香澄「ユークンユークンユークンユークン」
俺「えっ何これ」

たえ「スキィ」
有咲「モウニガサナイ」
りみ「ワタシノチョココロネ」
沙綾「イッショウメンドウミテアゲル」
俺「えっまじでどうしたの」
５人のいつもと違う怖さに腰が抜けてへたり込む
その瞬間彼女たちの拘束が解けたので一気に立ち上がって走る
当てもなく彼女たちがいる蔵から離れるが彼女たちはものすごい勢いで追いかけてくる
やばいやばいやばいやばい
俺はとにかく走った

# Ｐｏｐｐｉｎ、Ｐａｒｔｙ Ｅｎｄ
# 分岐Ｅｎｄ Ｐｏｐｐｉｎ、Ｐａｒｔｙ

俺は公園のゴミ箱の後ろにとりあえず隠れた
公園に来る少し前の道から５人が見えなくなったから少し休むために隠れているのだが心臓のバクバクが止まらない
走ってきたからというより５人に見つかるからだと思う
こんなになったのってやっぱり朝のあれだよなー
そもそも有咲とおたえは何であんなことをしたんだろうか
謎でしかない
「「みぃーつけたぁ」」
俺「ひぃ」
りみ「何でそんなに怯えてるの？」
たえ「全然怖くないよ」
香澄「帰ろっか」
俺「うわぁあああ」

また全力疾走で逃げる
３人の笑顔は今までに見た中で一番黒かった
ん？３人？
そういえば有咲と沙綾がいなかった
３人も追いかけてこない
何か考えているのだろうか
どっちにしても気をつけないと
有咲「まてぇー！」
俺「うわあああ」
前から有咲が出てくる
今までに来た方向を変えて逃げる
その後有咲と香澄とりみとおたえに追われていた
４人が一斉に来てるわけではなく全員バラバラに出てくる
沙綾がどこに行ったのか気になっていたが次々出てくるせいで沙綾どころか場所するも意識出来なくなっていた
気づいたときには有咲の家の前だった

まあ今は全員バラバラに俺を探してるみたいだしここにいても来ないはず
塀に寄っかかって休んでいると後ろから金属音がなる
しかも振り返る瞬間にもう一回金属音がなる
そこには沙綾が笑顔で俺の両腕に手錠をはめている光景が見えた
俺「沙綾!?」
沙綾「ふふ、捕まえた。逃げちゃダメでしょー　行こ?」
俺「行くってどこに」
沙綾「私たちの愛の巣に」
俺「ちょ引っ張るな　うわみんな来ちゃった」
有咲「来ちゃ悪いか　これからお楽しみだってのに」
たえ「ゆうくんひどーい」
俺「いや　その」
香澄「話　な　ら　あ　と　で　聞　く　か　ら　ね　?」
俺「いやぁあああ」
その叫び声も虚しく蔵の奥に連れて行かれる
俺「ちょっ手錠を柱につけないで」
りみ「こうしないと逃げちゃうでしょ」

たえ「はーい脱ぎ脱ぎするよ～」
俺「おい脱がすなぁ　そして香澄と有咲と沙綾何脱いでるの」
りみ「私たちも脱ぐから」
俺「そういう問題じゃなっ　むぐっ」
香澄「んちゅ・・・じゅる」
俺「んんんんー」
香澄にいきなりキスされる
何か喋ろうと思っても喋れず言葉の抵抗すらも出来ない
だんだん香澄の香りに犯されていって力が抜けてくる
りみ「やったー！一番最初に脱げた」
有咲「クッソーゆうの初めてはりみかー」
沙綾「惜しかったー　次は私ね」
香澄「んぱ　私、一番最後でいいよ　んちゅ」
有咲「香澄はキスの方がいいのか　んじゃ私が沙綾の次で」
沙綾「さっきからゆーくんの体を撫でまくってるおたえがその次だね」
たえ「もうみんな脱いじゃったの？早いね～」
有咲「お前が遅いだけだろー」

りみ「すごいおっきい」
俺「んんんん」
りみ「ダメだよ～ゆーくん　えへへ、ゆーくんの初めて頂きます♪」

ズブッ

★

あれからの記憶が曖昧だ
でもヤってしまったのだろう

もう何回も搾られたので体がだるくて動けない
ただこの快感に流されて5人のことしか考えられない
俺「はぁはぁ 香澄、沙綾、りみ、有咲、おたえ」
沙綾「いい目をしてるね」
たえ「かわいい～ ウサギみたい」
香澄「ふふっもう逃げられないよ さすがに5人と結婚できないけどずっと一緒に暮らせるね」
有咲「私たちシちゃったんだからな 他の女のところなんて行かせないけどもし行ったらどうなるか分かってるよな」
りみ「ゆーくんと繋がれて私とっても嬉しいよ ずっと一緒にいようね」
俺「・・・うん」

★

翌日クラスにて
香澄「おはよーゆーくん」
俺「お、おはよう」
りみ「昨日は激しかったね」
俺「ちょっここ学校だから」
沙綾「いいじゃんみんなにラブラブなところ見せつけようよ」
俺「昨日のこと知られたら退学どころじゃないって」
有咲「そうだぞ　ちゃんと学校生活はしないとな」
たえ「まあラブラブしてるのは見せつけるけどね」
「「「「大好きだよ　ゆーくん（ゆうくん）（ゆう）」」」」

# 沙綾＆りみ　ＥＮＤ
# 分岐Ｅｎｄ　りみ＆沙綾

走ること５分くらいで全力疾走はもう無理だった
とりあえず商店街の近くまで来た
車の通りが少ないから適当な場所に寄っかかることが出来るから来てみた
さっきの５人の光のない目を思い出す
様子が変わりすぎていて逃げ出したけどこれで良かったのだろうか
まあいいか　家に帰ってゆっくりしたいから帰るか
その瞬間後ろから硬いものが押し当てられる
バチバチバチバチ
俺は気を失ってしまう
記憶の最後にちょっとだけ２人の少女を写して倒れ込む

何だろ
息苦しい
何も見えなくて
布のような感触
顔に何かが乗ってる？
いい香りがする
しかも顔の上で動いている
２つ動きがある
思わず声を出してしまう
俺「んんんんむんー」
沙綾「あっ起きた」
りみ「おはよー」

★

俺「沙綾、りみ　ここって・・・何でこんなことを」
沙綾「私たちのものにするためにもう一度あの物置に来ちゃった」
りみ「ふふっ私たちのパンツどう？」
俺「どうって言われても・・・」
りみ「そうだよね　他の女の子に毒されすぎて分からなくなっちゃったよね」
沙綾「私たちがゆーくんに付いた毒をとってあげるから安心して♪」
りみ「ついでにちょっとゆーくんも他の女の子見ちゃったから、もう他の女の子が近付けないようにしてあげる」
俺「取り返しのつかないことって何だよ　とにかくそんなことは・・・ってあれ・・・動けない」
りみ「逃がさないって言ったよね　二重の手錠（ダブル手錠）だよ」
俺「いや　待ってぇ」
沙綾「大丈夫だよ　前に言ったけど取り返しがつかなくなることをしてあげるだけだから」
俺「取り返しのつかないことって何!?」
りみ「私たちがゆーくんの初めてをもらうこと」
俺「それってまさか／／／　そんなのダメ！」

沙綾「ダメなの?だって体は正直だよ」
俺「沙綾やめっ　っっああん」
沙綾「おっきくて固いよ?優しくナデナデされて気持ちいいんでしょ?ズボン越しより生で触られたいんでしょ?握ったり舐めたり・・・シてもいいんだよ?」
俺「ダメっ沙綾耳元で囁かないでぇ」
りみ「強情だねゆーくん。でもその気にさせてあげるから大丈夫だよ」
俺「ちょっりみ。乳首舐めないで」
沙綾「それいいねりみりん。私ももう片っぽ舐めよ」
俺「沙綾まで　ん・・・あっ」
りみ「この前の教育よりもっと強い繋がりがいるよねゆーくん♪・・・じゅる」
彼女たちのヌルヌルした唾液でベタベタになった乳首を舐めまくられて１０分もしないうちに力が抜けてしまった
沙綾「乳首舐め舐めよりキスのほうがいいかな　んちゅ」
りみ「そうかも　キスしながら片手で乳首触ってもう片っぽの手でゆーくんの硬いところをナデナデしたら喜ぶかも　ちゅ」
俺「んんんちゅっんんん」
２人はキスしながら唾液でヌルヌルの両乳首を優しく撫でながら［アレ］にも手を伸

ばして優しく握ったり撫でたりを繰り返す
さらに両脚は俺の片足に対して２本ずつの脚が絡んで本当に逃げられない
これがだいしゅきホールドとかいう奴なのか
左右の刺激が違うから余計に気持ち良くなってしまう
[アレ」を触られてすぐに何かが上がってくるような感じがする
俺「んんっ」
沙綾「ちょっと触っただけだけど出そうなの？」
りみ「早いねゆーくん　でも私たちも気持ち良くなりたいなぁ」
そう言うと全部の刺激が止まり一瞬で２人は裸になり俺の顔の上に跨がる
りみ「ゆーくん、舐めて」
沙綾「私も私も！交互に舐めてほしいなぁ　舐めないならちょっとお仕置きしなきゃいけないかな」
もうほとんど理性が残っていなかった
彼女たちのキレイな裸を見てしまい何かが切れるような感じがした
それから２人の愛を飲まされたりして満足したのか顔の上から離れる
沙綾「気持ち・・・良かった」

りみ「沙綾ちゃん、ゆーくんの初めて・・・譲るよ　先に沙綾ちゃんとゆーくんは居たんだから」

沙綾「ありがとりみりん。ゆーくん、これから取り返しのつかなくなることをしちゃうけど・・・いいよね」

俺「・・・うん」

沙綾「やっと・・・だね　じゃあゆーくんの初めて・・・頂きます」

ズブッ

★

やってしまった
２人に身を任せて、意識がはっきりしたときにはもう遅かった
これが事後っていうことを理解してしまった
裸で身を寄せ合い布団で寝ていた
あまり覚えていないのだがシてしまった後何枚もタオルを使って体を拭いてくれたみたいだ
あんなに体液だらけだった体は嘘のようにサラサラだ
今はただ遮るものが何もない状態で抱き合ってるので柔らかい感触や暖かさが直に感じられる
沙綾とりみも起きたみたいで体をすり合わせる
りみ「ふふっおはよゆーくん」
沙綾「ゆーくん、おはよ」
俺「お、おはよぅ」
りみ「どうしたのそんなに恥ずかしがって」
沙綾「そうだよこれから私たち」

「「ずっと一緒なんだよ」」

沙綾「もっと喜ぼ♪ゆーうーくん！」

りみ「もう逃がさないからね、ゆーーくん！」

この後他の女の子が寄りつくことはなく取り返しはつかなくなったものの割と楽しい日々になった

# 戸山香澄　ｅｎｄ
# 分岐Ｅｎｄ　戸山香澄

蔵から離れるように無我夢中で走ったいた
気づけば蔵も俺の家からも離れた場所に来ていた
確か誰かの家が近かったような気がする
それを考えられないほど走り疲れたので電柱に寄っかかって休む
しばらくどうしてこうなったか考えるが全然分からなかった
そろそろ息が整ったので歩こうと思ったが後ろから足音が聞こえる
すぐそこまで近づいてきた
香澄「ゆーくん　大丈夫？」
俺「か、香澄!?」
香澄「待って！逃げないで」
香澄の姿を見た瞬間走り出す
香澄も追いかけてくる
ちょっと走ったがそんなに走れずすぐに歩いてしまう

後ろから香澄が優しく抱きしめてくる
香澄「ゆーくん　安心してほしいなぁ」
俺「か、香澄抱きつくなー　恥ずかしいから」
香澄「ゆーくん照れてる！かわいい」
俺「かわいくないし　ってうわ」
いきなり香澄は俺の腕をつかみ俺を１８０。回転させる
さっきまで香澄に背中を向けていたが向き合うと目があった
そのまま香澄は俺を再び抱きしめる
かなり恥ずかしい
香澄「ねぇゆーくん　大丈夫だよ」
俺「恥ずかしいって香澄ぃ」
香澄は俺を抱きしめたまま頭を撫でる
香澄の髪の香りと頭を撫でられる感じが安心感を誘う
さっき５人に抱かれたときの光のない目を見てから恐怖心があったがすべて吹き飛んだ
そのままボーッとしてしまう
香澄「ゆーくん　行こ？」

俺「・・・うん」
香澄に言われたことの意味も理解してなかった
何も考えずに手を引かれて歩き出す

思考回路が働き始めた時は香澄の家にいた
しかもベットの上で香澄に抱きしめられていた
相変わらず頭を撫でながら俺を見つめる香澄にドキドキしてしまう
俺「香澄の家に俺何でいるの？」
香澄「ゆーくんをキラキラドキドキさせるためだよ」
俺「えっなにそれ」
香澄「キラキラドキドキって言われても分からないよね。でも私はゆーくんがどういうことをされたらドキドキしちゃうか知ってるから教えてあげる・・・例えば」
香澄は猫耳になっている髪を俺の顔の方に向けるとそのまま鼻に突っ込む
香澄の濃厚な香りが襲う
俺「香澄　ムズムズする～」
香澄「でもいい匂いでしょ？ゆーくんが女の子のいい匂いに弱いこと知ってるんだから」

俺「何で知ってるの」
香澄「ゆーくんってば私に抱きつかれるたびに匂いを嗅いでるからすぐ分かっちゃうよ　なんて愛しいんだろって・・・ゆーくんを私漬けにしてあげたいって思っちゃうのだからこれから香澄漬けにしてあげるね」
俺「香澄漬け・・・」
香澄「そ！香澄漬けだよ。ちゅ」
香澄にいきなりキスをされた
さっきからの香澄の香りがさらに興奮を引き立たせてしまう
そんな俺を香澄はジト目で見ている
俺が脳内で必死に戦っているのを知ってか耳元で囁く
香澄「ゆーくん、硬いの当たってるよ。私のに。私とシたいんでしょ？いいよ」
俺「!?　香澄　やめ」
香澄「ほ～ら　スリスリ～　朝有咲とおたえにされてたことだよ？」
俺「っっっっ　香澄ぃ」
香澄「シよ？」
その優しい囁きに耐えることも出来ずに香澄の中に入れられてしまった

★

香澄「ゆーくん！今日はどこに行く？」
俺「香澄が前から行きたかったデパートとかどう？服、１万までなら奢るよ」
香澄「いいの？やったー！今度何かお礼するね　あっそうだ」
俺「？」
香澄「付き合ってそろそろ１ヶ月が経つからさらにプラスしちゃお！」
俺「もうそんなになるのか～」
香澄「そうだね　これからもいっぱい香澄に甘えてね！ゆーくん☆」

# 市ケ谷有咲ｅｎｄ

# 分岐Ｅｎｄ　市ケ谷有咲

全力疾走で有咲の家から離れていたが、ふと思ったことがある
全員有咲の家から離れていて逆に有咲の家付近が安全じゃないのかと
さっきから走りすぎて疲れたので歩きながら有咲の家に向かう
もちろん道を変えながら

有咲の家の前まで来たがこの後どうするか
俺の家とかは完全に見張られているだろうし
深く考えていたため後ろからの気配に気づかなかった
首に冷たいものが巻かれる
俺「ちょ何!?」
有咲「行くぞ」
俺「どこに？しかも首の何!?」
有咲「いいから！首輪だよ」

いきなり首輪を付けられた俺は有咲に引っ張られてどこかに連れて行かれてしまった

ベットに乱暴に寝かせられて首輪の片方をベットの柱にくっつける

有咲「ちょっと喉ガラガラになってるじゃん　飲めよ」

俺「ありがと、有咲　んぐっ・・・ごく・・・ごく　んっ何これ」

有咲に付けられた首輪のせいで喉が乾燥していたところに渡された・・・というより飲まされた液体はただの水ではなかった。

ドロドロしていて変な味だった。飲み終わっても口の中がその味だった

有咲「私の愛・・・かな　ゆうを考えていたら・・・出ちゃった」

俺「おまっそれ」

有咲「あああうるっせえ　恥ずかしいんだよ・・・」

俺「ていうか　何これ　体が」

有咲「効いてきた？前私の家に泊まったときよりもちょっと強い薬をさっきの愛に入れてたんだ。今度は他の女に盗られないようにしてあげる♪ついでに私の欲求不満を解消させるための性欲処理調教もしてあげるからね」

俺「有咲・・・やめっ」

有咲「拒否するのかよ・・・他の女に毒されたのか？まあいいか。身も心も私のもの

にしてあげる　一生私と入れるようにね。」
俺「ひゃん・・・ありしゃぁあ」
有咲「いい声で鳴くじゃん」
有咲は俺の上に乗ってこの前のように体中を撫でまくる
しかも有咲と見つめ合って俺の乳首と有咲の大きな胸をすり合わせ、足は絡まされて体が完全に密着しているのでとても強い刺激を感じてしまう
あっという間に硬く、大きくなった［アレ］が有咲の股に当たる
すぐにバレないよう腰を後ろに引いたが絡んだ有咲の足が俺を逃がさない
有咲「バレバレだよ、ゆう。」
俺「ぐっ」
有咲「まだ・・・もっとドキドキしてからな」
俺「あっっ」
有咲「そういえばゆうって私の喋り方女の子っぽいほうがいいよね。これからそうするよ」
俺「い、いや別に・・・」
有咲「ゆうもツンデレかな？　かわいい！ねぇゆう。好き　ちゅ」
俺「ありｓむぐ」

有咲は自分に耐えられなくなったのかいきなりキスをしてくる
有咲のちょっと長めなしっとりした髪が俺の顔に垂れてくる
有咲のいい香りが俺を襲い始める
さらにキスしている有咲の声やいつもと違った女の子っぽい喋り方やトロトロした目、有咲の細い髪ですらも魅力を感じてしまう
いつもそんなに感じたことのない有咲の色気は俺の理性をことごとく破壊していく
有咲「ぷはっ　ゆう　もう我慢できない」
俺「はぁっはぁ　有咲」
有咲「シちゃお　ゆう」
声も出せない俺はもう正しい判断が出来ずに頷いてしまう
有咲「大好きだよ　ゆう」

ずぶっ

★

その後
有咲「ねぇゆ～う」
俺「んどした？」
有咲「今日も一緒に中庭でご飯食べて　弁当も・・・その・・・作ってきたから」
俺「いいよ」
有咲「ふふっありがとゆう　ポピパの子もいるけどいい？」
俺「しょうがないよね。有咲の友好関係崩す訳にはいかないし」
有咲「そうね。後で処理してほしいからそのときに・・・な」
俺「分かったよ」
あれから有咲は喋り方が乙女になったせいかさらに魅力を感じてしまう
そんなかわいい彼女と一緒にいれてすごい幸せなんだな
他の仲いい女子とはツンデレを発揮する有咲は俺だけにはデレデレになってとてつ

もない破壊力だ

とびっきりの笑顔を俺に向けて腕を引っ張る有咲は前とは違う素直な子になってい

た

# 花園たえ　ｅｎｄ

# 分岐Ｅｎｄ　花園たえ

有咲の家の蔵から途中休み休み家へ走って帰ると家の電気が付いていた
今は家に誰もいないはずなのにおかしい
警戒しつつ電気の付いている部屋の方に行く
それはキッチンからだった
何か焼く音が聞こえ始めた
ドアの隙間から誰がいるのか確認する
そこにいた相手に動揺して勢いよくキッチンに入ってしまう
俺「お、おたえ!?」
たえ「ゆうくんおかえり～」
俺「おかえりじゃないし、何でここにいるの」
たえ「えっ？食べないの？ご飯」
俺「いや食べるけど・・・何でおたえが作ってるの　しかもエプロンまで」
たえ「私の役目だから当たり前でしょ。エプロンも自分で作ったやつだけど、変かな

？あっ！やっぱりゆうくんは裸エプロンの方が好きだった？」
俺「は、はだっ　なに言ってるんだよ～」
たえ「恥ずかしいがってるゆうくんもかわいいよ　まだ時間掛かるからゆっくりして～」
俺「しょうがねーな」
もうなに言っても作るだろうと思った俺はおたえの料理を食べることにした
出来るまでの間ゲームでもやって待っていた

たえ「おまたせー」
俺「ありがとうおたえ」
たえ「いいの。食べよ」
俺「うん」
おたえの料理はうまかった
人の弁当を取っていくおたえとは思えなかった
のだが途中で何か喉に違和感を感じる
何か突き刺さるような感覚
喉に細かい何かが貼り付いている

急いで飲み物を飲んで息を整えてその中身をみると
びっしり髪の毛が入っていた

俺「おたえ・・・これ」
たえ「髪の毛だよ。いっぱい食べてね」
俺「いっぱい食べてねじゃないよ、何で髪の毛を入れるの」
たえ「私を・・・体の中に」
俺「ふぇ!?」
どうしようもなかった
おたえの髪を食べるのは気が引ける
どうにかして説得しないと
でも余計なことを言うと面倒になりそうだ
俺「あのおたえ、おたえの美しさを表してるといってもいい髪を入れるのはちょっと・・・その　せっかくおたえかわいいのに髪の毛無くなったら嫌だから入れないで」
たえ「ゆう、くん?　ゆうくーん!キューンとしちゃった」
俺「えぇちょおたえ、そんな抱きしめなくても」
たえ「かわいいよ　ゆうくん。そうだ!ゆうくんじゃなくてゆうちゃんって呼ぼ」

何か突っ込みを入れたかったがおたえに抱きしめられていて眠くなっていってしまった
たえ「花園ランド、一緒に作ろ？」
その言葉を残して記憶が途切れてしまった

目を覚ますと完全に動くことは出来なかった
両腕両足は完全に手錠を付けられて服を脱がされていた
横には俺の体を撫でているおたえがいた
たえ「起きた？」
俺「おたえ　くっ　ちょやめ」
たえ「おっきくなってるよ」
俺「だってそんなに優しく撫でられたら」
たえ「気持ちよくなるよね　キス・・・しよ」
俺「んぐっっちゅ」

おたえにいきなりキスをされてドキドキしてしまう
おたえの長くてツヤツヤな髪からのいい香りが俺を襲う
下着姿のおたえは恥ずかしさも無いのか柔らかい胸や太ももを俺の乳首と大きくなった［アレ］にスリスリしている

しばらくするとキスから解放されそのまま胸を俺の顔に乗せてきた
太ももは相変わらず［アレ］を挟んでしごく
おたえの胸に覆われて息が苦しいがいい香りがさらに濃厚になっていつの間にか俺は抵抗を止めていた
そのまま快感に流されていく
しばらく気持ち良すぎることをされて全く力が出なくなってしまう
だいぶしごかれて出そうになっていた
たえ「ゆうちゃん、花園ランド作っちゃお？」
俺「花園・・・ランド」
理解する間も無く再び胸を押し付けられた瞬間

ずぶっ

★

あれから俺の暮らす家はおたえの家になっていた
花園ランドという名前の場所でおたえと共に
たえ「ゆうちゃん大好き」
俺「俺もだよ　おたえ」
その至福の空間が俺のすべてになっていた

たまにペットのように俺を撫でたり抱きしめたりしてくれてすっかりおたえに癒されていた
初めは腕輪とか首輪を柱につけていたが最近ではおたえ・・・いやご主人様が自由にしてくれた
首輪と腕輪はつけっぱだがこの方が俺は安心出来る
だってこれだけでご主人様と繋がってるような気がするから

# 山吹沙綾　ｅｎｄ
# 分岐Ｅｎｄ　山吹沙綾

何も考えずに有咲の蔵を飛び出して走っているが依然として5人は俺の後ろを走っている

商店街の裏道を駆使して俺がどっちに行ったか分からなくさせる方法を思い付いて早速細い裏道に入る

すぐに足音や話し声とか聞こえなくなった

一応元いた道を見てみるも遠くの方に有咲と香澄っぽい人影が見えたので安心してゆっくり歩く

しばらく商店街の道を進んでいたが突然走ってくる足音がして振り返ろうとしたその時に固い金属のようなものが首に当てられる

そのまま視界は暗黒になってしまった

目を開けると誰かの部屋にいた
ベッドで寝かされ・・・ってあれ!?服が無い
パンツ以外すべて脱がされていた
焦って起きようとすると両腕についた手錠のせいで動けなかった
枕とかからいい香りがする
しかもこの香りは覚えがある
沙綾だ
あの沙綾のポニーテールに顔を近付けたときによくこの匂いがしていた
いつまでも嗅いでいたい中毒性がある
少しすると部屋の扉が開く
沙綾「ゆーくん　起きてたんだ」
俺「沙綾・・・これは?」
沙綾「りみりんには悪いけどゆーくんの面倒を一生見てあげる」
俺「どういう　んちゅ」

沙綾にキスをされる
無意識のうちにあの甘い沙綾の香りを枕とかからではなく直接沙綾から嗅いでいた
1分くらいで解放される
沙綾「ん　ゆーくんと昔したときと同じ味。覚えてるか分からないけどゆーくんのファーストキスは私となんだよ。ずーっとゆーくんが好きだったんだから」
俺「そんなに好きだったんだ」
沙綾「だからこれから私だけのゆーくんにしてあげるからね。ふふっそうだ、キスしてたときに私の匂い嗅いでたでしょ。」
俺「いやっその」
沙綾「恥ずかしがらなくていいよ。昔からたまに嗅いでたよね。もっと依存させてあげる」
俺「バレてたんだ・・・　依存って？」
沙綾「私の匂いももっと好きになって、私がいないとダメな体にしてあげるってこと」
俺「沙綾のことを・・・もっと」
今までやまぶきベーカリーの手伝い（ほぼいるだけでＯＫだったという謎の手伝い）をしていて沙綾と一緒の時間が多かったが恋愛として意識したことはなかった
いや意識していないことにしていた

だってあんなに可愛くていろいろ出来て優しい沙綾のことを好きって思わないわけないよ
だけど沙綾ってそんなの興味無いとか他にもいろいろ思っていた
だから沙綾に告白されたのも驚きだった
知らず知らずのうちに沙綾と話す時間も少なくなっていった中学校のときもずっと沙綾は俺を好きだったと思うと何か沙綾のことが急に恋しくなり始めた
沙綾「中学校のころあんまり話せなくて寂しかったけどゆーくんが女の子と話すのが恥ずかしくなってる時期だと分かったらさらに私は恋愛的に意識しちゃって、高校に入ったら他の女の子と話してて何かもう我慢できなくなっちゃったんだ。だからゆーくん、私とずっと一緒にいてほしいな」
俺「そんなに俺のことを・・・」
沙綾「うん　だから、ゆーくん。いい?」
俺「・・・いいよ　むしろ幸せだよ」
沙綾「ありがとゆーくん　それと他の女と必要以上に仲良くしたら許さないからね」
俺「・・・おう」

★

あの後は沙綾にキスされたり一件あったが何とか帰ることが出来た
今は学校に来ている
学校ではいつもののようにスキンシップが激しかった
チラッと沙綾をみるとヤバいくらいの黒いオーラが出ていた
沙綾さんまじヤバいっす
昨日の逃げたことについてはどこにいたのくらいしか聞かれずちょっと安心出来た

昼休みは授業が終わった瞬間沙綾に腕を掴まれ手に何も持たないまま中庭に連れて行かれてしまった
怒っちゃったかな・・・
先に中庭に行った俺たちは沙綾特製の弁当をもらった
実は昨日弁当は沙綾が作ると連絡があったので持ってきていなかった

沙綾の機嫌を気にする俺をよそに香澄達がくる
香澄「ゆーくんと沙綾早いね」
沙綾「そうだね。時間をムダにしたくないからね」
有咲「シビアだな」
そんな光景の横にはボケッとしてるおたえとめっちゃ怒ってるりみがいた
何でそんなに怒ってんだりみは
沙綾に抜け駆けされたの分かってるからかな
その後沙綾は他の子の弁当と俺の口に入れることを許さず俺はただただ沙綾の弁当を食べていた

★

蔵練の後沙綾の家に強制連行された

またベットに寝かされ手錠で繋がれてしまう
沙綾「他の女と仲良くしたらダメって言ったよねゆーくん」
俺「そんな仲良くしてないよ」
沙綾「うそよ。まあいいよ　ちょっとゆーくんに教えてあげるから」
俺「何を」
沙綾「私からは一生逃げられないって」
そう言うと沙綾は俺のズボンとパンツをずり降ろした
すぐに尻を撫でられる
しかも普通に撫でられるよりも気持ちいい
この気持ち良さは覚えがある
俺「沙綾、まさか　んっ　薬を　あん　いれた?」
沙綾「気づいた?蔵練の時に差し入れでいれたパンに入れたんだ。今日は本気だから」
俺「本気ってまた叩かれるの」
沙綾「本当は叩いてほしんでしょ」
俺「そんなこと・・・」
沙綾「ある?」

俺「・・・ある」

沙綾「でしょ？この前のがクセになっちゃうくらい気持ち良かったんだよね。このままドMにしてあげる」

その後俺は沙綾に叩かれて気持ち良くなってしまい沙綾のことしか考えられなくなった

俺「はぁ・・・はぁ・・・沙綾ぁ」

沙綾「あれぇ？ゆーくん。すっごく大きくなってるよ」

俺「んっ　沙綾」

沙綾「分かってるよ。シたいんだよね　このまま絶頂させてあげるね」

ずぶっ

# 牛込りみ　ｅｎｄ
# 分岐Ｅｎｄ　牛込りみ

もう夕暮れも近く空はまだオレンジ色で少し明るいが道はもう暗かった
人通りは少ないがすれ違う人はおそらく顔が見えないであろう
そんななか俺は一人の少女に追われていた
必死に逃げるしかなく顔や姿を確認している暇は無いため誰か分からない
後ろを一瞬振り向いてみたが左肩を軽く電柱にぶつけてしまったのであきらめた
近くに遊具の多い広い公園があったので逃げ込む
もちろん向こうも公園へ入ってくるがちょっと距離があったためか先に遊具の中（かまくらみたいな、中でおままごとが出来るような遊具）に入った俺を探すように歩く
必死に息を殺してバレないようにしている
もちろん心臓はバクバクして止まらない
遊具の入口とは反対側の窓のような穴で様子を見てみる
すべり台の下とかをしっかり確認する彼女
暗くて小柄なことしか分からない

つまりこの時点でおたえは除外される
ついでに髪型は有咲や沙綾じゃないことが分かった
そしてネコ耳らしき髪型じゃないことが分かったので香澄でもない
ということはあそこにいるのは・・・っていない
誰かを予測している間に別の場所を探しに行ったらしい
急いでどこに行ったか見回すが姿がない
あきらめてどっか行ってくれたかと思い振り返った瞬間に口の中に何かが放り込まれる
誰か俺の後ろに立っているのを確認したのは口の中に入ったものがチョコレートだったことに気づくより後だった
あっという間にチョコレートは口の中で溶けた
無意識的にチョコレートを飲み込むとそこにいた人物が誰かようやく分かった
俺「り・・・み・・・」
りみ「ふふっゆーくん。美味しい？私の手作りチョコレート」
俺「美味し・・・って・・・何か・・・ねむ」
りみ「お休み。ゆーくん」
俺の薄れゆく意識の最後にりみの天使みたいな笑顔が写り込む

それを見ながら眠ってしまった

★

曲が聞こえる
さっきからリピートかかってるのかずっとこの曲が流れている
自分が寝てたことを理解したので目を開けた
まず二段ベットで寝ていた。俺の家にそんなものはないのでここは俺の家じゃないことは明確だ
そしてそのベットからいい香りした
お察しだなこれ
りみのベットで寝ていたようだ
さすがに女子のベットで寝ることが恥ずかしく体を起こす

部屋が暗いので電気をつけた
紛れもなくりみの部屋だった
机にはよく分からんヤバそうな薬が置いてあって心配にはなったがとりあえずここを出ることにした
ドアに進もうとした瞬間反対からドアが開かれた
りみ「おはよゆーくん」
俺「り、りみ。何でメイド服着てるの」
りみ「ゆーくんのパソコンの検索履歴みたら・・・そういうのが好きなんでしょ」
俺「うぇー見られてたの!?恥ずかしすぎるよ。」
りみ「ゆーくんのことはしっかり見てないとね♪」
俺「うぅ」
りみ「それでね、ゆーくん。沙綾ちゃんには悪いけどもう他の女に近づいてほしくないから私の愛をいっぱい注ぎ込みたいの」
俺「りみの愛?」
りみ「そうだよ　まずゆーくんを逃げられないようにしちゃうね」
俺「うわぁ!?」
りみは素早く抱きつくとそのまま俺を倒してきた

後ろはさっきのベットでどこも打ち付けずに済んだ
りみ「ちゅ」
俺「んむ　んっ」
りみにキスされて力が抜けていく
彼女の髪からの甘い香りは俺の判断力を鈍らせ虜にしていく
さらに抱きしめられてしまう
１０分くらい経ったときようやく俺は解放される
りみ「ゆーくん、キス美味しかったよ」
俺「キスが美味しいって・・・まあいいか」
りみ「えへへ　ねぇゆーくん私ポピパの中だったら胸小さいよね。揉んだら大きくなるって聞いたからいつでも揉んでいいよ」
俺「揉んでいいよじゃないって。ってか何で半脱ぎ状態なの」
りみ「どうしても揉まないっていうなら私が揉ませてあげればいいなって」
俺「いいよ。絶対揉まないから　って腕掴むな」
りみ「ほらこれが私の胸の感触だよ。今日からこの感触はゆーくんだけのものだからね」
俺「いいって」

りみ「もう、恥ずかしがり屋さんだね　じゃあちょっと耐性つけなきゃね」
俺「うわぁ」
りみは俺を転がしてベットの上から落とす
床にはレジャーシートとその下に柔らかいマットみたいのがあって痛くなかった
そのまま上から勢いよくりみも降りてきて再びキスを始める
今度は今の間までに溜めてたと思われる唾液を俺の口の中に入れてきた
甘い
唾液が無くなるとまた溜めてりみは唾液を俺の口の中に流し込んだ
繰り返すこと１０回くらい、疲れたのかまた解放される
まだ唾液を溜めているのか喋らず天使のような笑顔を見せながら立ち上がる
そして机の上にあった瓶を２つ取って床に置く
それで何かされるのは確実なので逃げようとしたがもう遅かった
再びキスしてきて唾液を流す
横から何かを唾液と一緒に口の中に入れてきた
何も考えることなくまた飲み込んでしまった

それからしばらくキスされていたがだんだん体がおかしくなっていくのが分かった

りみ「ふふ　そういえばね　これチョコレートの匂いがついたローションなんだ～
これを使ったらゆーくんどうなっちゃうのかな」
俺「やめっ　というか体が・・・」
りみ「効いてきたみたいだね」
俺「えっ」
りみ「ふふ　ほらぬりぬり～」
俺「ひゃん　ぬりゃれてるだけにゃのに」
りみ「気持ちいいでしょ　今からもっと気持ちよくなれるからね」
体に広がる気持ち良さの余韻に浸ってる俺の横でりみはメイド服を脱いでいた
すぐに脱ぎ俺の上に寝転がる
２人とも裸で体を密着させている
俺はさらなる刺激に耐えることが出来ず声を上げてしまう
りみが胸や腹とかをこすりつけて新たな刺激を生む
ローションも相まって気持ち良すぎてしまう
チョコレートの匂いのするローションと媚薬の組み合わせはヤバすぎた
りみの脳トロボイスでの喘ぎ声は俺の理性を容赦なく破壊していく
俺「はぁ・・・んっ・・・はぁ・・・りみぃ」

りみ「はぁ・・・ゆーくん　シちゃお？」

その言葉は天使のような笑顔から放たれた悪魔のささやきだったが判断することも無く頷く

りみ「えへへ　ゆーくん・・・だぁいすき」

ずぶっ

# おまけ
# ゆりりんりみりん姉妹

春休みが始まって1日目の休日俺はりみに呼び出された
用件はチョコレートクッキーを作ったから食べに来てほしいという内容だった
りみってチョコレートが好きすぎて買って食べるということから自分でアレンジしたチョコレートのお菓子を作るようになってそれからときどき俺にもくれたりするのだ
休日だからなのか家に呼び出されて一緒に食べよって言われたのは初めてだったので最初は驚いて遠慮したがむしろ来てほしいと言われ行くことにした
りみの家の玄関に入るとりみとゆり先輩がいた
りみ「ゆーくんおはよー」
ゆり「お久しぶり～　いつも通り元気そうね」
俺「りみおはよ！　ゆり先輩お久しぶりです」
ゆり「そんなかしこまらなくてもいいのよ」
俺「そ、そうですね」

りみ「ふふっ　クッキーの材料いっぱいあったからいっぱい作っちゃって誰かにあげたかったんだ～　休日に呼び出してごめんね～」
俺「大丈夫だよ。むしろ呼んでもらって嬉しいよ」
りみ「良かった～」
まあまさかゆり先輩がいるとは思わなかったけどね
ゆり先輩とは俺が中学校のころりみと知り合ったときに良く会っていた
今はポピパといることが多いのでなかなか会わなかった
ちょっと緊張してしまう
りみ「これが作ったチョコレートクッキーなんだ～　めっちゃいっぱい作っちゃった♪」
俺「いや大きいタッパーが6個くらいあるんだけどまさか全部チョコレートクッキーなの？」
りみ「そうだよ　本当にいっぱいあるから遠慮しないで食べてね。お昼ご飯も一応あるけど食べていく？」
俺「昼ご飯までいいの？じゃあ食べていこうかな。ていうかそんなにチョコレートクッキーあるんだったらおやつにも食べようかな」
りみ「じゃあ午前中のクッキーは少なめがいいよね。後３０分くらいでお昼だし今か

らお昼ご飯の用意しちゃうね」
そう言い終わるとりみは昼ご飯の用意をしに行った
ゆり先輩とりみの部屋で俺は待つことにした
その間ゆり先輩と学校の事とかを話していた
しばらくするとりみが昼ご飯を運んできた
りみ「出来たよ～」
俺「おっ美味しそう！」
ゆり「りみのご飯は本当に美味しいから今日のも楽しみ」
りみ「そんなハードル上げないでよ」
りみのちょっと困った顔がかわいかった
3人で食べるご飯はすごく美味しかった
昼ご飯を食べ終わるとりみはタッパーに入っていたチョコレートクッキーとはまた別の梱包されたチョコレートクッキーを俺に渡す
りみ「まずこっちからあげるね。さすがにタッパーのより袋に入ったクッキーの方がいいと思って。もちろん後でタッパーのクッキーも出すからね」
俺「ありがとう～こんなきれいなラッピング出来るってすごいね」
りみ「ありがとゆーくん。じゃあお昼ご飯の片付けしてくるね　待ってる間クッキー

食べててね」
ゆり「私もやるよ。ゆーくんはゆっくりしてて」
俺「分かりました」
二人は部屋を出て行って片付けをしにいった
暇なのでさっきもらったクッキーを食べる
すげえうまい
夢中で食べていると部屋の中が静かだったからか眠たさが襲い始める
でもここで寝て迷惑をかけるわけには行かない。
そう思いつつも睡魔には勝てず寝てしまった

★

目を開けるとベットで寝ていた
すぐに寝る前何してたかを思い出す
外はもう暗くなっていた
そんなに寝ちゃったのか
ゆり先輩とりみに迷惑かけちゃったな
謝らないきゃと思い起き上がると金属質な何かが動きをとめる
それが何なのか確認する前に声をかけられる
りみ「ゆーくんおはよ～」
俺「お、おはよ　りみ」
ゆり「あっ起きた？」
俺「えっとどういう状況なんでしょうか」
りみ「私とお姉ちゃんと一緒に暮らそ？」
俺「えっ？」
困って思わずゆり先輩の方を向く
ゆり「春休みの間ずっとここにいてほしいの。出ちゃダメだよ」

俺「まあ春休みすることは宿題くらいだからいいですけど」
ゆり「それとこれからは私に敬語と先輩禁止ね。これから私とりみはゆーくんの彼女なんだから」
俺「か、彼女!?頭がグチャグチャになってきた」
りみ「私とお姉ちゃんはゆーくんのことが好きなの　恋愛としてね。だから他の子に取られたくないの　そのためにはゆーくんとここで暮らせばいいと思ったんだ」
ゆり「一生2人で愛してあげるからね」
りみ　ゆみ「大好きだよ、ゆーくん！」
その瞬間2人にキスされる
思えば2人とも可愛くて美少女姉妹ってよく聞く
そんな2人に愛されるとは思ってもいなかった
ゆりさんの長めの髪とりみの短めの髪が俺の顔にかかる
二人の濃厚ないい香りが俺の思考とかを溶かしていく

ゆりさんとりみの唇が離されたかと思うと向こうで布音がする
すぐに俺の方に来たのだが
俺「ゆりさんもりみも何でそんな格好を!?」

ゆり「部活の時にスクール水着着てたらゆーくんすっごく見てくれたでしょ。そんな水着の感触とか味わってほしいなって」
りみ「私もゆーくんに感触を味わってほしいから」
俺に抱きつく2人
いつの間にか俺も服を脱がされていた
生で2人の柔らかさ体が押し付けられる
2人は抱きつきながら体を上下に擦り付ける
スクール水着のツルツルした感触が全身を襲う
ゆりさんの胸が顔の上に乗った瞬間にそのまま押し付けられてしまう
胸からのゆりさんの香りがいい香りだった
りみも俺の背中を柔らかい体で擦り付けていた
大きくなった［アレ］をゆりさんのスクール水着ですべすべな股でこすり始める
少しするとスクール水着は色付いていた
いつの間にか理性など吹っ飛びゆりさんとりみのされるがままになり強い［繋がり］も拒否できずシてしまった

その後学校が始まるまでずっと手錠をつけられたまま逃げる気力もすぐに無くなり
この状況を受け入れてしまった

# 戸を開けると４つの山があった

戸山家

香澄「ねぇねぇあっちゃん！」

明日香「何？おねーちゃん」

香澄「恋ってなに？」

明日香「ええ!?いきなりどうしたの？」

香澄「今度ポピパの新曲で好きな人について考えることになってね。あっちゃんって好きな人とかいるの？」

明日香「あーびっくりした。好きな人を直球で聞いてくるってさすがお姉ちゃん・・・」

香澄「さすがってどういうこと」

明日香「恥ずかしいことも直球なんだなって。そうだねー。私は」

その後香澄の絶叫が聞こえたらしい

春休みの初日ポピパは毎日練習することにしたらしく俺も行くことになった
他にもせっかくの春休みなんだからやりたいことあるだろと思ったのだが５人とも練習をするのが楽しいらしい
ということでいつものごとく俺は香澄に引きずり回される日々となった
春休みだからどっか行きたかったけど美少女５人に招待されるのも人生にもう一回あるかどうかも分からないのでこちらを選んだ
今日は午前中のみの練習になっていた
まあ春休み初日だし午後はゆっくりしたいよな
アドバイスになるかどうか分からないことを言った後練習終わりとなった
終わる直前に香澄からメッセージが来た
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
この後時間空いてたら私の家に来てくれる？
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
珍しい、香澄が家に呼ぶとは
しかも近くにいるのにわざわざ携帯に送るのはあまりみんなに見られたくないのであろう
悟られないようにその場を離脱して適当な裏道を歩く

香澄の家の前に行くと明日香がいた
明日香「先輩お久しぶりです。お姉ちゃんに呼ばれたんですよね。急にすいません」
俺「いやいや大丈夫だよ。何かあったの？」
明日香「ちょっと相談したいことというか・・・お願いがあるので呼んだんです。お姉ちゃんが帰ってくるまでお茶でも飲んで待っててくれませんか？」
俺「うん分かった」
明日香も相談したいのかな
呼んだんですって言ってるし
まあ香澄が来たら話すんだろうしゆっくりするか

香澄の部屋に明日香は脚が折りたたみのテーブルを出してお茶の入った湯飲みを置いた
その様子は某スクールアイドルのアニメに出てくる和菓子屋の妹みたい
髪は茶色のショートヘアーだし姉よりしっかりしているというところが似ている
現実にこんな子がいるのが驚きだ
お茶を飲みながら明日香と向かい合って座っている

なかなか気まずい
明日香「まだお姉ちゃん帰ってこなさそうですね。すいません」
俺「しょうがないよ。香澄だもん」
明日香「そうですよね。いつもお互いにお姉ちゃんに振り回されてばっかり」
俺「やっぱ明日香も香澄に振り回されてるんだ」
明日香「一番長くお姉ちゃんといますから」
俺「そうだよね。」
この会話を終えると再び話が途切れる
その無音状態のせいか眠たくなっていった
次の瞬間にはもう視界が暗転していた

★

体に重たさを感じる
口が開かない
そしていい香りがする
よく分からなかったが寝ていたようだ
意識がはっきりしてきて普通に家で寝ているのと違うと思い目を開ける
口から何かが離れた
香澄「あっ起きた！どお？お目覚めのキスは」
俺「あれ？香澄・・・　お、お目覚めキスって!?」
香澄「私の最初のキスだよ」
俺「いやそうじゃなく」
明日香「おはようございます。お兄ちゃん」
今なんていった
お兄ちゃんだと・・・
訳が分からない
俺「明日香、お兄ちゃんって？」
明日香「妹萌えってあるじゃないですか」
俺「萌えたけど。何でこんなことになってるの」

明日香「お兄ちゃんをお姉ちゃんと私のモノにするんですよ」
俺「俺が香澄と明日香のモノ？」
香澄「そうだよ。あっちゃんと私はゆーくんのことが好きなの。だから他の子には渡さないようにしたいの」
俺「そんなこと言わｒ」
明日香「ちゅっ」
明日香に口を奪われる
何も言えなくなってしまう
短い髪なのに隣にいるだけで感じる明日香のいい香りが広がる
明日香に気を取られていたからか香澄の行動に気付けなかった
ズボンを素早く脱がし香澄の胸を俺の［アレ］に押し付けていたのだ
谷間に入れるわけではなく下着ごとむにゅむにゅとする
その軽い刺激はもっと強い快感を求めるように促進する
香澄「ゆーくんはそのままでいいよ。私たちがゆーくんをもらうから」
そのまま香澄の胸によって軽い刺激が与えられた
３分くらいたっただろうか、俺は抵抗することを止めていつの間にか香澄と明日香にもっとしてほしいと思ってしまった

香澄「もっとしてほしいよね」
心を見透かされた感じだ
思わずうなずく
香澄「ふふっじゃあ挟んであげるね」

その後香澄と明日香に搾られてしまった
体が結構汚れたので風呂に入ることにした
香澄と明日香は準備してくると言ってどっかに行ってしまった
風呂は沸いているようなので力の抜けた体でゆっくり風呂場に向かう
風呂の戸を開けるとそこには香澄と明日香の胸があった
香澄「ゆーくん見ちゃったね」
明日香「責任とってね、おにーちゃん♪」
俺「いや待ってぇ」
そんな声も虚しく風呂場にビニールシートが引かれているところに押し倒され
繋がってしまった